ミンガラバー こんにちは

認定 NPO法人
日本・ミャンマー
医療人育成支援協会
〒700-0815
岡山市北区野田屋町2-4-18
TEL：086-224-0102
FAX：086-221-2554
URL：http://www.mjcp.or.jp

古都で2つの贈呈式

ミャンマーの古都タウングー（バゴー管区）で10月16日、2つの贈呈式があった。最新の超音波診断機器2点と車いす45台。いずれも協会を通じての寄贈だ。

超音波診断機器を
日本臨床麻酔学会

超音波診断機器を贈ったのは日本臨床麻酔学会。事務局が岡山大学病院麻酔学教室にある。式には、かつて同教室の教授だった森田潔・前岡山大学長が出席し、タウングー、マグウェー両総合病院長に手渡した。

ミャンマーでは新しい医療機器の導入が徐々に進められているが、それらは最大都市ヤンゴン、首都ネピドー、第2都市のマンダレーが中心で、それを使いこなすのが急務になっている。地方では整備そのものが遅れているのが実情だ。

それだけに両病院長は、日本からの支援に感謝するとともに、機器を十分に活用して遅れている地方の医療向上に役立てたい、という趣旨のお礼の言葉を述べた。

タウングー、マグウェー両病院長に超音波診断機器を手渡す森田岡山大学前学長＝タウングー総合病院

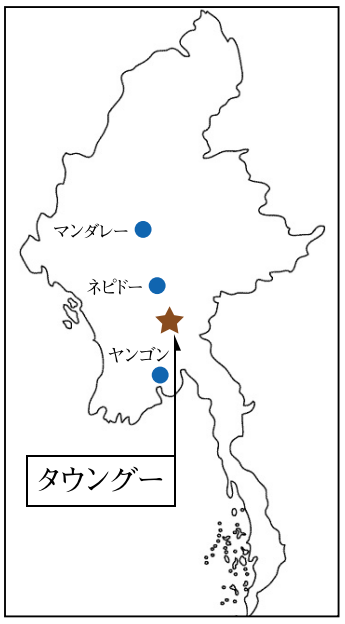
車いす45台贈る
京都東ロータリークラブ

車いすは京都東ロータリークラブ（吉川順介会長）による寄贈。これが8回目で、今までに送り続けた車いすは、今回の45台を合わせて245台にのぼる。

この車いす寄付活動は、協会の岡田茂理事長が京都大学の研究者だった頃の恩師の教授が同ロータリークラブの会員だった縁がきっかけ。2009年から始まり、贈呈式には歴代の会長らが参加してきた。

今回は同ロータリークラブの関係者は参加しなかったため、代わりに岡田理事長がミャンマー国民健康財団のタンセイン理事長に託した。車いすはバゴー管区の各地にある保健所で使われる。

王朝の街のシンボル



タウングーは昔、王朝があった街だ。ミャンマーでは13世紀末、バガン王朝が元の侵攻によって滅亡して以後、長い間、部族や都市の小国家が乱立。それを16世紀前半に統一したビルマ族がここに都をおいた。

この王朝は約60年で勢力を失ったが、その頃に建てられたのがシュエサンドパゴダで、今も街のシンボルになっている。ミャンマーで寺院といえばヤンゴンのシュエダゴンパゴダが有名だが、ともに頭に付く「シュエ」は黄金という意味。

タウングーは太平洋戦争のビルマ戦線で日本軍の物資集積地となり、多くの日本兵らが犠牲になった所でもある。（岡田理事長撮影）

4度目のミャンマー

「明日からでも使用」
目輝かす病院医師

森田 潔
岡山大学
前学長

10月15日から3日間、ミャンマーを訪れました。過去には、岡山大学医学部の医療支援活動10周年記念行事、大学間協定の締結、また国際同窓会支部設立の行事など岡山大学長としての訪問でした。

麻酔学会を支援

4度目の今回は、日本臨床麻酔学会の事務局長としての訪問で、この学会は国際活動の一つとしてアジア各国の医療支援を行ってきました。3年前からはミャンマー麻酔学会の支援活動を岡田先生に助けていただきながら始めました。

そんな経緯で、今回、タウングーでの医療機器贈呈式に招かれ、初めての地方都市訪問となりました。ヤンゴン到着の夜は、ミャンマー麻酔学会長のアウンシュエソウ教授のご自宅での夕食にヤンゴン総合病院麻酔科の先生らと招かれ、奥様のミャンマー手料理に舌鼓をうちました。

贈呈式に約50人

翌16日、朝早くから車で約4時間、ヤンゴン郊外の田園風景を眺めながら、ミャンマー唯一の高速道路、日本でいえば普通の道路ですが、それをひた走り、タウングーの街にたどり着きました。

午後、タウングー総合病院で50名ほどが集まるなか贈呈式が行われました。現地のバゴー管区保健福祉大臣や病院関係者、日本臨床麻酔学会からは私と中塚秀輝川崎医科大学教授、事務局の五十里松男さんが出席しました。

宿泊したリゾート風ホテル＝タウングー

タウングー総合病院とマグウェー総合病院にそれぞれ日本臨床麻酔学会から超音波診断装置を贈呈。また京都東ロータリークラブからは管区内の保健所に車いすが贈られました。ミャンマー国民健康財団のタンセイン理事長や岡田先生の挨拶では、ミャンマーに対するこれまでのサポートと日本臨床麻酔学会から寄贈の経緯などの話があり、タウングー総合病院麻酔科部長は「明日からでも腕神経叢ブロックに使用できる」と目を輝かせていました。

タウングーの街は、想像したとおりの東南アジアそのものでしたが、ホテルは心配に反して、この街には不釣り合いなほどリゾート風の快適なホテルで、夜は関係者との懇親の会食で友好を深めることができました。

◇

今回のミャンマー訪問は、長年医療支援活動を続けて来られた岡田先生の大きな力の賜物を感じ、私どももこの流れに沿って、ミャンマーの医療支援、医療者の養成活動、学会交流活動を今後とも続けて、ミャンマーと日本との素晴らしい関係を発展させていく一つの助けになればと思った旅でありました。

食品医薬品局と岡山大薬学部

人材育成へ協力確認

すでに3人 大学院に

ミャンマー保健・スポーツ省の食品医薬品局（FDA）のタントゥ局長、キンチット副局長ら4人が10月下旬、岡山を訪れて3日間滞在した。人材育成の協定を結んでいる岡山大学薬学部の檜垣和孝学部長らと意見交換をし、協力関係をいっそう充実させることを確認した。

岡山大学薬学部と意見交換をするタントゥ局長（右端）、キンチット副局長（右から2人目）、マイクを持つのは仙谷・日本ミャンマー協会副会長、左端は岡田理事長＝薬学部会議室

ミャンマーでは食品や医薬品、化粧品などをチェックする体制が十分でなく、法整備や人材育成が課題になっている。

キンチット副局長はかつて、協会の岡田茂理事長が岡山大教授時代にヒ素について共同研究したことがあり、その縁から同理事長に相談。去年、岡山大薬学部とFDAの間で協定が結ばれ、すでに3人が大学院で学んでいる。

意見交換には日本ミャンマー協会の仙谷由人副会長（元官房長官）や日本製薬工業会の関係者も参加。懇談会も開かれ、岡山大の槇野博史学長や金澤右病院長らが出席した。

病院や施設を見学

岡山学芸館高校 1年生9人

岡山学芸館高校（岡山市東区）の1年生9人が森健太郎校長らと一緒に12月18日から5日間、ミャンマーを訪れた。生徒たちは全員、医療や福祉関係の仕事を目指しており、冬休みを利用して病院や施設などを見学する海外研修旅行だ。同高校からミャンマーを訪れるのは3度目。

まず、マンダレー郊外の吉岡秀人医師が運営する「ジャパンハート」の病院を見学した。同医師は小児外科医で、1995年からミャンマーで医療活動を始め、これまでにアジア各地で大勢の子供たちの命を救ってきた。

ヤンゴンでは、郊外の八田施療クリニック内の「岡山学芸館高校産院クリニック」を視察した。ここは昨年、同校の生徒が募金活動をし、これに学校側も協力して、協会を通じて贈った寄付クリニック。

一行はさらに自閉症センターを訪れたり、ダゴン第一高校で生徒同士の交流をしたりした。

岡山大ミャンマー学生連盟
チョウソウルィン会長

岡山大学ミャンマー学生連盟の会長にさきごろ、工学部大学院生のチョウソウルィンさんが選ばれた。現在、岡山大にはミャンマー出身の32人が留学している。連盟はその親睦団体。前任のタテサン医師が医学博士号を取得して帰国した後任だ。新会長に自己紹介してもらった。

協会は心強い存在です

私はミャンマー第2の都市マンダレーで1981年に生まれました。マンダレー工科大学、ヤンゴン工科大学から学士、修士、博士（電子工学）の学位を得ています。日本のJICA（国際協力機構）の「工学教育強化プロジェクト」の長期研修生に選ばれ、岡山大工学部の博士課程に入学しました。

今は3年生で、通信ネットワーク工学の船曳信生先生のもとで勉強しており、テーマは「無線LAN」についての研究です。

このような研究活動だけではなく、日本語を勉強する良い機会に恵まれています。日本の伝統的な文化や食事も楽しんでいます。とにかく毎日は楽しみと新しい経験にあふれています。岡山大のミャンマー留学生は全学部にわたっており、連盟は親睦が目的で一緒に食事したり、互いに相談にのったりしています。

協会の招きで岡山にやってくる医療関係の短期研修生にも、どこの食事がおいしいか、行楽にはどこがいいか、などをアドバイスしています。協会は、異国で生活する私たちにとって、何かあった時に相談できる心強い存在です。

私はヤンゴン工科大学の電気通信学科の教授も務めており、いずれミャンマーに帰ったときは、日本で学んだ経験を友人や学生と共有したいと思います。

協会だより

准助産師、新たに20人

あかね基金3期生

西山央子理事が設けた奨学制度「あかね基金」で、准助産師の資格をとるため勉強していた20人が半年間の研修を終えた。その修了式が10月18日、ヤンゴンの国民健康財団集会室であった。

この奨学制度は2015年にスタートし、今年が3期生。19年までの5年間に毎年20人ずつ、計100人の准助産師を育てる計画だ。

修了式にはすでに働いている1・2期生の中から10人がお祝いに駆けつけた。「もう24人の赤ちゃんを取りあげました」「病院とのつながりができ、対応が難しいときにはすぐに病院に連絡しています」などと話していた。

3期生20人の修了式＝ヤンゴン

医薬品30万円分贈る

診療所約10か所に

大洪水募金から

協会は10月、ミャンマー国民健康財団を通じてエーヤワディー川ぞいの低湿地にある診療所約10か所に薬品30万円分を贈った。いずれの診療所も2015年のミャンマー大洪水で被災、今でも薬品が不足がちなところ。

大洪水の際、協会は支援の募金活動をし、協会員らから約50万円が寄せられ、現地からの要請で、泥水を浄化して飲料水に変える薬剤20万円分を届けた。

残り30万円の使途については水浄化にあてる予定だったが、薬品が欲しいという声があり、そちらに変更した。

協会は3期生全員に聴診器、血圧計、体温計、赤ちゃん用体重計などがセットの、いわば助産師の"7つ道具"をプレゼント。また西山理事はこれからの終了予定者を含む5年間の全員に仕事着100人分を贈った。

健康誌編集長が取材

協会ヤンゴン代表のミョウキン医師（元国立医学研究局長）と、ミャンマーの健康雑誌で一番読まれている「ヘルスダイジェスト」のキンマウントゥエ編集長が10月、協会の招きで岡山を訪れた。

ミョウキン医師は岡山大学国際同窓会の総会に出席した。

医師でもあるキンマウントゥエ編集長は岡山大病院の金澤右病院長にインタビューしたり、岡山画像診断センター（加地充昌病院長）や玉野市の老健施設を取材したりした。取材内容は近く「ヘルスダイジェスト」誌に掲載される予定。

編集後記

岡山大学長を退任後も、何かとお忙しい森田潔さんに、そんな中、ミャンマー訪問記を寄稿してもらいました。終わりに、こう書かれています。「長年医療支援活動を続けてこられた岡田先生の大きな力の賜物を感じ・・・」▼このくだりに当の理事長はしきりに恐縮。そういえば常日頃、協会の活動をここまで充実させることができたのは、病院や医学部をはじめとする岡山大学の協力が大きく、これも学長の理解があってこそ、といっています。

（西﨑）